

キューバ危機に似る

北朝鮮の「核」は、日本の安全保障に對しては、「觀念上の脅威」ではなく「現実の脅威」を浮上させている。北朝鮮「核」危機への対応は、1962年10月のキューバ危機の際の米国の対応と似たものになるであろう。キューバ危機の折に、米政府が「庭先」の脅威に相對したように、現在の日本もまた、朝鮮半島という「庭先」の脅威に向き合っているのである。

1980年代半ば、ジョセフ・S・ナイ（国際政治学者）は、他の学者との共同論文の中で、キューバ危機当時の米政府要人の立場を「タカ派」、「ハト派」、「フクロウ派」の三つに分類した。M・D・テラー統合參謀本部議長に代表される「タカ派」とA・E・スティーンソン国連大使のような「ハト派」は、そ



れぞれ「キューバ・ミサイル基地に対する直接攻撃」と「外交交渉によるミサイル撤去」を唱えたのに対して、R・S・マクナマラ国防長官を中心とした「フクロウ派」は、情勢の変化に応じて政策の柔軟性を確保することを優先し、「キューバの海上封鎖」を模索した。そして、様々な議論の結果として、J・F・ケネディ大統領は、「海上封鎖」を選択したのである。

極論を戒める

ところで、この「フクロウ派」という発想は、日本では余り定着していない。日本における安全保障論議は、従来は「タカ派」と「ハト派」の二項対立の図式の中に膠着し、誠に観念的な様相を呈していた。しかも、「タカ派」と「ハト派」の議論は、本来は国際政治認識のスタイルを表すものに過ぎないにもかかわらず

櫻田 淳

「北」の核「フクロウ」の知恵

ず、冷戦期の「保守」や「革新」といった党派対立に巻き込まれた結果、互いに響き合わない感情的な言葉の遣り取りに終始していた。そうした観念的にして感情的な議論の応酬は、本来は「可能性の芸術」である政治の場において、たとえば自衛隊イラク派遣や集团的自衛権行使に絡む議論の折に、様々な政策上の可能性が冷静に検討されるのを妨げてきたのである。

「フクロウ派」には、たとえば「中道」という言葉に醸し出される折衷主義的な意味合いはない。「タカ派」と「ハト派」は、様々な事態を前にして「明快な処方箋」を示そうとする余りに往々にして極論に走る傾向を帯びるという点では、実は互いに似た性格を持つ。けれども、「フクロウ派」は、現実の国際情勢が「明快な処方箋」で相對するには複雑なものであることを知る故に、軽率な対応によって事態が「糸が切れた瓶」のようなものになるのを懼れ、そうした極論を戒めようとする。

冷静な議論を

様々な対外政策課題を前にして本質的に「待てない」国民世論を相手にして、「フクロウ派」は、「忍耐」を説こうとする。日本においては、こうした「フクロウ派」という立場は、対外政策課題に「明快な処方箋」を求める国民感情には応えるものはなかったかもしれないけれども、「現実の脅威」が浮上した現在、それが認知されることの意義は決して小さくないのである。

もっとも、ナイは、たとえばイラク戦争に際して自らを「フクロウ派」と位置付けたけれども、「タカ派」、「ハト派」、「フクロウ派」の何れが正しいのかという問いには、他の学者とともに「三つの何れもが正しい」と答えている。重要なことは、「現実の脅威」を前にした「タカ派」、「ハト派」、「フクロウ派」の三者三様の実践的な議論が幅広く行われることである。こうした三者三様の幅広い議論こそが、全体として日本の「抑止力」を担保し、その安全保障に寄与する。北朝鮮の「核」は、日本における広い意味での「論」や「知」の世界にも試練を与えているのである。



さくらだ・じゅん 政治学者。1965年宮城県生まれ。著書に「国家の役割とは何か」「国家への意志」など。